仙人

芥川龍之介

上

いつごろの話だか、わからない。北支那の市（まち）から市を渡って歩く野天（のてん）の見世物師に、李小二（りしょうじ）と云う男があった。鼠（ねずみ）に芝居をさせるのを商売にしている男である。鼠を入れて置く嚢（ふくろ）が一つ、衣装や仮面（めん）をしまって置く笥（はこ）が一つ、それから、舞台の役をする小さな屋台のような物が一つ――そのほかには、何も持っていない。

　天気がいいと、四つ辻の人通りの多い所に立って、まず、その屋台のような物を肩へのせる、それから、

鼓板（こばん）を叩いて、人よせに、謡（うた）を唱う。物見高い街中の事だから、大人でも子供でも、それを聞いて、足を止めない者はほとんどない。さて、まわりに人の墻（かき）が出来ると、李は嚢の中から鼠を一匹出して、それに衣装を着せたり、仮面（めん）をかぶらせたりして、屋台の鬼門道（きもんみち）から、場へ上（のぼ）らせてやる。鼠は慣れていると見えて、ちょこちょこ、舞台の上を歩きながら、絹糸のように光沢（つや）のある尻尾を、二三度ものものしく動かして、ちょいと後足（あとあし）だけで立って見せる。更紗（さらさ）の衣裳の下から見える前足の蹠（あしのうら）がうす赤い。――この鼠が、これから雑劇の所謂（いわゆる）楔子（せっし）を演じようと云う役者なのである。

すると、見物の方では、子供だと、始から手を拍って、面白がるが、大人は、容易に感心したような顔を見せない。むしろ、冷然として、煙管を啣えたり、鼻毛をぬいたりしながら、莫迦にしたような眼で、舞台の上に周旋する鼠の役者を眺めている。けれども、曲が進むのに従って、錦切れの衣裳をつけた正旦の鼠や、黒い仮面をかぶった浄の鼠が、続々、鬼門道から這い出して来るようになると、そうして、それが、飛んだり跳ねたりしながら、李の唱う曲やその間へはいる白につれて、いろいろ所作をするようになると、見物もさすがに冷淡を装っていられなくなると見えて、追々

まわりの人だかりの中から、※子大（そうしだい）［＃「口＋桑」、42-13］などと云う声が、かかり始める。すると、李小二も、いよいよ、あぶらがのって、忙（せわ）しく鼓板を叩きながら、巧（たくみ）に一座の鼠を使いわける。そうして「沈黒江（こっこうにしずむ）明妃（みんぴ）青塚恨（せいちょうのうらみ）、耐幽夢（ゆうむにたう）孤雁（こがん）漢宮秋（かんきゅうのあき）」とか何とか、題目正名（だいもくせいめい）を唱（とな）う頃になると、屋台の前へ出してある盆の中に、いつの間にか、銅銭の山が出来る。

………

が、こう云う商売をして、口を糊（のり）してゆくのは、決して容易なものではない。第一、十日と天気が悪いと口が干上ってしまう。夏は、麦が熟す時分から、例の

雨期へはいるので、小さな衣裳や仮面（めん）にも、知らないうちに黴（かび）がはえる。冬もまた、風が吹くやら、雪がふるやらするので、とかく、商売がすたり易い。そう云う時には、ほかに仕方もないから、うす暗い客舎（はたご）の片すみで、鼠を相手に退屈をまぎらせながら、いつもなら慌しい日の暮を、待ちかねるようにして、暮してしまう。鼠の数（すう）は、皆で、五匹で、それに李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方（ゆくえ）の知れない二人の子の名とがつけてある。それが、嚢（ふくろ）の口から順々に這い出して火の気のない部屋の中を、寒そうにおずおず歩いたり、履（くつ）の先から膝の上へ、あぶない軽業（かるわざ）をして

這い上りながら、南豆玉（なんきんだま）のような黒い眼で、じっと、主人の顔を見つめたりすると、世故（せこ）のつらさに馴れている李小二でも、さすがに時々は涙が出る。が、それは、文字通り時々で、どちらかと云えば、明日（あす）の暮しを考える屈託（くったく）と、そう云う屈託を抑圧しようとする、あてどのない不愉快な感情とに心を奪われて、いじらしい鼠の姿も眼にはいらない事が多い。

その上、この頃は、年の加減と、体の具合が悪いのとで、余計、商売に身が入らない。節廻しの長い所を唱うと、息が切れる。喉も昔のようには、冴（さ）えなくなった。この分では、いつ、どんな事が起らないとも限ら

ない。――こう云う不安は、丁度、北支那の冬のように、このみじめな見世物師の心から、一切の日光と空気とを遮断して、しまいには、人並に生きてゆこうと云う気さえ、未練未釈(みしゃく)なく枯らしてしまう。何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないか。勿論、李は一度もそう云う問題を考えて見た事がない。が、その苦しみを、不当だとは、思っている。そうして、その苦しみを与えるものを――それが何だか、李にはわからないが――無意識ながら憎んでいる。事によると、李が何にでも持っている、漠然とした反抗的な心もちは、この無意識の憎

しみが、原因になっているのかも知れない。しかし、そうは云うものの、李も、すべての東洋人のように、運命の前には、比較的屈従を意としていない。風雪（ふうせつ）の一日を、客舎（はたご）の一室で、暮らす時に、彼は、よく空腹をかかえながら、五匹の鼠に向って、こんな事を云った。「辛抱（しんぼう）しろよ。己（おれ）だって、腹がへるのや、寒いのを辛抱しているのだからな。どうせ生きているからには、苦しいのはあたり前だと思え。それも、鼠よりは、いくら人間の方が、苦しいか知れないぞ…………」

中

雪曇りの空が、いつの間にか、霙（みぞれ）まじりの雨をふらせて、狭い往来を文字通り、脛（はぎ）を没する泥濘（でいねい）に満そうとしている、ある寒い日の午後の事であった。李小二（りしょうじ）は丁度、商売から帰る所で、例の通り、鼠を入れた嚢（ふくろ）を肩にかけながら、傘を忘れた悲しさに、ずぶぬれになって、市（まち）はずれの、人通りのない路を歩いて来る——と、路傍（みちばた）に、小さな廟（びょう）が見えた。折から、降りが、前よりもひどくなって、肩をすぼめて歩いていると、鼻の先からは、滴（しずく）が垂れる。襟からは、水がはいる。

途方に暮れていた際だから、李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へかけこんだ。まず、顔の滴をはらう。それから、袖をしぼる。やっと、人心地がついた所で頭の上の扁額（へんがく）を見ると、それには、山神廟（さんじんびょう）と云う三字があった。

　入口の石段を、二三級上（のぼ）ると、扉が開いているので、中が見える。中は思ったよりも、まだ狭い。正面には、一尊（いっそん）の金甲山神が、蜘蛛（くも）の巣にとざされながら、ぼんやり日の暮を待っている。その右には、判官（はんがん）が一体、これは、誰に悪戯（いたずら）をされたのだか、首がない。左には、小鬼が一体、緑面朱髪で、猙獰（そうどう）な顔をしているが、こ

れも生憎、鼻が虧けている。その前の、埃のつもった床に、積重ねてあるのは、紙銭であろう。これは、うす暗い中に、金紙や銀紙が、覚束なく光っているので、知れたのである。

李は、これだけ、見定めた所で、視線を、廟の中から外へ、転じようとした。すると丁度その途端に、紙銭の積んである中から、人間が一人出て来た。実際は、前からそこに蹲っていたのが、その時、始めて、うす暗いのに慣れた李の眼に、見えて来たのであろう。が、彼には、まるで、それが、紙銭の中から、忽然として、姿を現したように思われた。そこで、彼は、い

ささか、ぎょっとしながら、恐る恐る、見るような、見ないような顔をして、そっとその人間を窺って見た。

垢じみた道服を着て、鳥が巣をくいそうな頭をした、見苦しい老人である。(ははあ、乞丐をして歩く道士だな――李はこう思った。)痩せた膝を、両腕で抱くようにして、その膝の上へ、髯の長い頤をのせている。眼は開いているが、どこを見ているのかわからない。やはり、この雨に遇ったと云う事は、道服の肩がぐっしょり濡れているので、知れた。

李は、この老人を見た時に、何とか語をかけなければ、ならないような気がした。一つには、濡鼠になっ

た老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、また一つには、世故がこう云う場合に、こっちから口を切る習慣を、いつかつけてしまったからである。あるいは、また、そのほかに、始めの無気味な心もちを忘れようとする努力が、少しは加わっていたかも知れない。そこで李が云った。

「どうも、困ったお天気ですな。」

「さようさ。」老人は、膝の上から、頤を離して、始めて、李の方を見た。鳥の嘴のように曲った、鍵鼻を、二三度大仰にうごめかしながら、眉の間を狭くして、見たのである。

「私のような商売をしている人間には、雨位、人泣かせのものはありません。」
「ははあ、何御商売かな。」
「鼠を使って、芝居をさせるのです。」
「それはまたお珍しい。」
　こんな具合で、二人の間には、少しずつ、会話が、交換されるようになった。その中に、老人も紙銭の中から出て来て、李と一しょに、入口の石段の上に腰を下したから、今では顔貌（かおかたち）も、はっきり見える。形容の枯槁（ここう）している事は、さっき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相手を見つけたつもりで、嚢（ふくろ）や笥（はこ）を

石段の上に置いたまま、対等な語（ことば）づかいで、いろいろな話をした。

道士は、無口な方だと見えて、捗々（はかばか）しくは返事もしない。「成程な」とか「さようさ」とか云う度に、歯のない口が、空気を噛むような、運動をする。根の所で、きたない黄いろになっている髯も、それにつれて上下（うえした）へ動く、――それが如何にも、見すぼらしい。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が、生活上の優者だと考えた。そう云う自覚が、愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であると云う事が、何となくこの老人に対して済

まないような心もちがした。彼は、談柄を、生活難に落して、自分の暮しの苦しさを、わざわざ誇張して、話したのは、完く、この済まないような心もちに、煩わされた結果である。

「まったく、それは泣きたくなるくらいなものですよ。食わずに、一日すごした事だって、度々あります。この間も、しみじみこう思いました。『己は鼠に芝居をさせて、飯を食っていると思っている。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食っているのかも知れない。』実際、そんなものですよ。」

李は撫然として、こんな事さえ云った。が、道士の

無口な事は、前と一向、変りがない。それが、李の神経には、前よりも一層、甚しくなったように思われた。（先生、己（おれ）の云った事を、妙にひがんで取ったのだろう。余計な事は云わずに、黙っていればよかった。）――李は、心の中でこう自分を叱った。そうして、そっと横目を使って、老人の容子（ようす）を見た。道士は、顔を李と反対の方に向けて、雨にたたかれている廟外の枯柳（こりゅう）をながめながら、片手で、しきりに髪を掻いている。顔は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにいるらしい。そう思うと、多少不快な気がしたが、自分の同情の徹しないと云う不満の方が、そ

れよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災（こうさい）へ持って行った。この地方の蒙った惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャスティファイしてやりたいと思ったのである。

　すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顔をむけた。皺の重なり合った中に、可笑（おか）しさをこらえているような、筋肉の緊張がある。

「あなたは私に同情して下さるらしいが、」こう云って、老人は堪（こら）えきれなくなったように、声をあげて笑った。鳥が鳴くような、鋭い、しわがれた声で笑ったのである。「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みな

ら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい。」

李は、話の腰を折られたまま、呆然として、ただ、道士の顔を見つめていた。(こいつは、気違いだ。)――やっとこう云う反省が起って来たのは、暫くの間瞪目して、黙っていた後の事である。が、その反省は、すぐにまた老道士の次の話によって、打壊された。

「千鎰や二千鎰でよろしければ、今でもさし上げよう。実は、私は、ただの人間ではない。」老人は、それから、手短に、自分の経歴を話した。元は、何とか云う市の屠者だったが、偶々、呂祖に遇って、道を学んだと云うのである。それがすむと、道士は、徐に立って、廟

の中へはいった。そうして、片手で李をさしまねきながら、片手で、床の上の紙銭をかき集めた。

李は五感を失った人のように、茫然として、廟の中へ這いこんだ。両手を鼠の糞と埃（ほこり）との多い床の上について、平伏するような形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めているのである。

道士は、曲った腰を、苦しそうに、伸ばして、かき集めた紙銭を両手で床からすくい上げた。それから、それを掌（てのひら）でもみ合せながら、忙（せわ）しく足下へ撒きちらし始めた。鏘々然（そうそうぜん）として、床に落ちる黄白（こうはく）の音が、にわかに、廟外の寒雨（かんう）の声を圧して、起った。――撒か

れた紙銭は、手を離れると共に、忽(たちま)ち、無数の金銭や銀銭に、変ったのである。………

李小二は、この雨銭(うせん)の中に、いつまでも、床に這ったまま、ぼんやり老道士の顔を見上げていた。

下

李小二は、陶朱(とうしゅ)の富を得た。偶(たまたま)、その仙人に遇ったと云う事を疑う者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰った、四句の語を出して示すのである。この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾な

がら、それを、文字通りに記憶していない。そこで、大意を支那のものを翻訳したらしい日本文で書いて、この話の完りに附して置こうと思う。但し、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐をして歩くかと云う事を訊ねた、答なのだそうである。

「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚だ、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」

恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなって、わざわざ、苦しい事を、探してあるいていたのであろう。

（大正四年七月二十三日）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年９月24日第１刷発行
１９９５（平成７）年10月５日第13刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月６日公開
２００４年３月９日修正